

「2017 年度お茶の水女子大学大学院の教育・研究環境調査」の報告

合澤典子・石田千晃

お茶の水女子大学 教学 IR・教育開発・学修支援センター

Report on “The survey of the education and research environment for Ochanomizu University’ s graduate students in 2017”

Noriko AIZAWA and Chiaki ISHIDA

Ochanomizu University Center for Institutional Research, Educational Development, and Learning Support

This paper is excerpt of the results of the survey titled “Questionnaire about education and research environment for graduate students” conducted in January, 2018. Three hundred and twenty-two graduate students answered through the online survey. We asked about evaluation towards the curriculum for graduate students, including the support for a career plan after degree acquisition. In the questionnaire, we also collected the data how students were satisfied with the facilities in the university, such as the number of library books, IT equipment, and room for research. Many of graduate students satisfied with their studies and relationship with their supervisors, but we found some points to improve in proceeding the research in a globalized environment.

keywords : Education and research environment for graduate students, Career support for graduate students

はじめに

今後ますます進む知識基盤社会において、大学院教育の果たす役割は大きくなると予測されている（文部科学省，2010）。これまでに大学院の質的・量的な充実が図られてきた一方で、様々なキャリアパスを目指す大学院生と大学側が提供する教育・研究環境のミスマッチも指摘されてきた（文部科学省，2010）。特に大学院教育の実質化、国際的な通用性および信頼性の確保などの施策（文部科学省，2006）に基づき、「社会との対話と連携による教育の充実と、学生が将来への見通しを持てる環境の構築」や「大学院教育のグローバル化の促進」が重要であると言われている（文部科学省，2011）。

お茶の水女子大学の大学院教育も、上記のような状況を鑑み、「21 世紀 COE」や「グローバル COE」など大学院生に特化したプロジェクトを実施し、高度な教育と研究に資する活動を展開してきた。例えば、世界で活躍できる女性博士人材育成のための「大学院博士課程教育リーディングプログラム」や文理融合と学際性を特色とするカリキュラムの編成がそれにあた

る。さらに、昨年度からは大学院教育の一環として、個別の職業を意識したキャリア副専攻も始まり、大学間、産業界との交流協定も充実している。海外の研究機関と連携したカリキュラムの編成も進んでいるが、今後の大学院教育の更なる充実を図るためには、現時点でお茶の水女子大学に所属する大学院生が、同大学の教育・研究環境をどのように評価しているかを把握する必要がある。上記のような目的により 2018 年 1 月下旬から 2 月上旬にかけてアンケート調査を実施した。以下にその結果の一部を報告する。

アンケート調査概要

アンケート調査は、2017 年 8 月時点でお茶の水女子大学大学院に在籍する博士前期課程 508 名、博士後期課程 382 名（休学者も含む）を対象として実施し、322 名が回答した。アンケート調査には、教学 IR・教育開発・学修支援センターで運用している Plone（オープンソースの Contents Management System。参考：<https://crdeg5.cf.ocha.ac.jp/crdeSite/pdf/16786.pdf>）を用いた、ウェブ調査票を利用した。

回答者の所属は、博士前期課程 190 名（回収率 37.4 %）、博士後期課程 131 名（34.3 %）、無回答 1 名であった。回答者全体のうち、在学中は 274 名（85.1%）、休学中は 25 名（7.8%）、在学中（留年）は 21 名（6.5%）であった。

アンケート調査の集計結果

回答者の専攻の内訳は博士前期課程（以降、博士前期）では、比較社会文化学専攻が 22.1%、人間発達科学専攻は 18.9%、ジェンダー学際研究専攻（ジェンダー社会科学専攻）は 9.5%、ライフサイエンス専攻は 18.9%、理学専攻 24.2%、生活工学共同専攻 6.3% であった（Fig.1）。博士後期課程（以降、博士後期）では、比較社会文化学専攻が 35.9%、人間発達科学専攻は 28.2%、ジェンダー学際研究専攻（ジェンダー社会科学専攻）は 9.9%、ライフサイエンス専攻は 9.9%、理学専攻 13.7%、生活工学共同専攻 2.3% であった。

大学院教育の評価

所属する研究科や専攻のディプロマポリシーやカリキュラムポリシーの理解度について尋ねたところ、博士前期の 69.5% が「知っている」（「良く知っている」「だいたい知っている」と回答し、26.9% は「知らない」（「あまり知らない」「知らない」と回答した。博士後期では「知っている」と回答したのは 82.4% であり、「知らない」と回答したのは 15.3% であった（Fig.2）。

大学院生が捉えるお茶の水女子大学の大学院教育のレベルは、博士前期では 63.7% が「高い」と回答し、12.1% が「低い」と回答した。博士後期では 56.5%

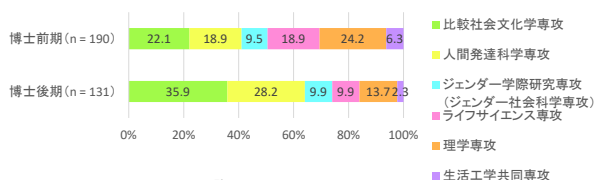


Fig. 1 回答者の専攻

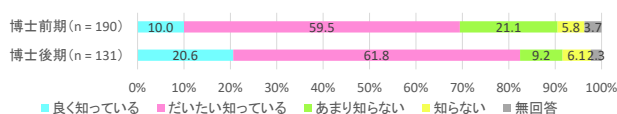


Fig. 2 ディプロマポリシー / カリキュラムポリシーの理解度

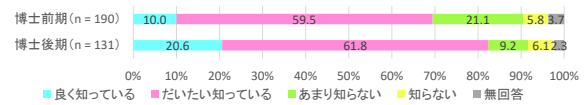


Fig. 3a 大学院教育としてのレベル

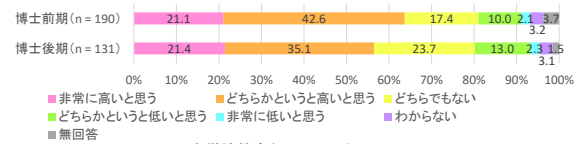


Fig. 3b 大学院教育の評価：専門科目の授業

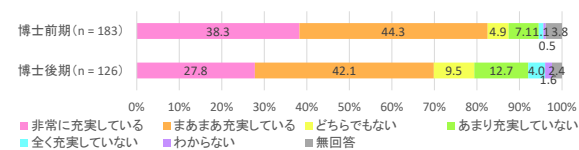


Fig. 3c 大学院教育の評価：外国語の授業

が「高い」、15.3% が「低い」と回答した（Fig.3a）。

各専攻のポリシーに関しては、博士前期よりも博士後期において理解度が高く（Fig.2）、大学院の教育レベルに対する評価は、博士後期よりも博士前期で「高い」ことがわかった（Fig.3a）。

次に大学院で実施されている授業に対する評価を見ていきたい。大学院の専門科目授業についての評価は、専門科目授業を履修したことがある学生 310 名に回答してもらった（Fig.3b）。「充実している」と回答したのは、博士前期の 82.6%、博士後期の 69.9% であった。「充実していない」という回答は、博士前期の 8.2%、博士後期の 16.7% であった。博士前期のほうが専門科目について「充実している」と回答していることがわかる。

大学院教育における外国語授業の評価については、受講したことがある 112 名に回答を求めた（Fig.3c）。博士前期では 60.0%、博士後期では 51.8% が「充実している」と評価したが、「充実していない」という回答もそれぞれの課程で 2 割以上であった（博士前期 23.7%、博士後期 28.6%）。専門科目に満足している割合と比較するといずれの課程でも 2 割程度「充実している」のスコアを落としていることがわかる。

研究活動について

現在の修士論文・博士論文の研究テーマについての満足度については、博士前期の 70.6%、博士後期では 77.9% が「満足である」と回答した（Fig.4）。

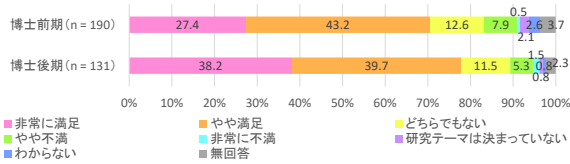


Fig. 4 研究テーマへの満足度

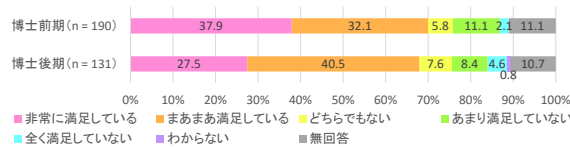


Fig. 5 ゼミ・研究室の活動への満足度

研究活動の時間数

授業やゼミ以外で、自分で行う 1 週間あたりの研究活動時間は、博士前期で平均 26.51 時間、博士後期は 24.16 時間であった。専攻別では、比較社会文化学専攻が 27.25 時間、人間発達科学専攻は 25.92 時間、ジェンダー学際研究専攻（ジェンダー社会科学専攻）は 26.93 時間、ライフサイエンス専攻は 23.86 時間、理学専攻 23.83 時間、生活工学共同専攻 24.42 時間となった。

ゼミ・研究室の活動

所属するゼミ・研究室の構成人数について尋ねた。専攻別では、比較社会文化学専攻は 10.43 人（幅：1～23 名）、人間発達科学専攻は 11.38 人（幅：1～22 名）、ジェンダー学際研究専攻（ジェンダー社会科学専攻）は 9.93 人（幅：3～20 名）、ライフサイエンス専攻は 9.12 人（幅：2～21 名）、理学専攻 10.94 人（幅：1～30 名）、生活工学共同専攻 10.44 人（幅：5～18 名）であった。構成人数の幅（最小値～最大値）からは、ゼミ・研究室の人数が数名のところや 20 名近くのところが存在することが分かった。

所属するゼミ・研究室の活動への満足度を尋ねたところ、博士前期では 70.0%、博士後期では 68.0% が「満足している」という結果であった。「満足していない」と答えたのは、博士前期の 13.2%、博士後期 13.0% であった（Fig.5）。

研究の指導について

指導教員から 1 か月あたりに受ける研究指導の時間は、博士前期では 5.45 時間、博士後期では 4.33 時間であった。専攻別では、比較社会文化学専攻は 5.17 時間（幅：0～24）、人間発達科学専攻は 5.22 時間（幅：

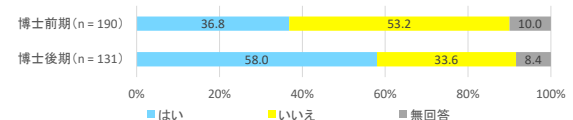


Fig.6 指導教員以外の教員からの研究指導の有無

Fig. 6 指導教員以外の教員からの研究指導の有無

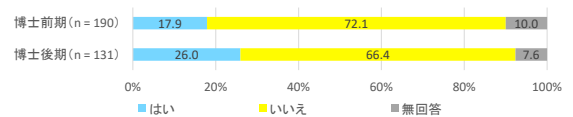


Fig. 7 大学院在学中の留学の経験・予定

0～24)、ジェンダー学際研究専攻（ジェンダー社会科学専攻）は 4.19 時間（幅：0～10）、ライフサイエンス専攻は 4.90 時間（幅：0～20）、理学専攻 5.18 時間（幅：0～24）、生活工学共同専攻 4.00 時間（幅：1～20）であった。指導時間に関連する自由回答では、「指導教員が多忙により指導時間の確保が難しい」、「指導教員が雑務や役職により多忙で、個別の指導が受けにくい」、「ゼミの学生の人数が多い為、指導時間が少ない」といった声もあることから、教育・研究以外の業務による多忙さや、抱える学生数の多さが、指導時間に関係していることも推察される。

指導教員以外の教員（学内外の共同研究者含む）から、個別に研究指導を受けたことがあるか尋ねたところ、博士前期では 36.8%、博士後期では 58.0% が「はい」と回答した（Fig.6）。博士後期では半数以上の大学院生が指導教員以外の教員からも指導を受けた経験があることになる。

お茶の水女子大学の国際化について

大学院在学中の留学の経験・予定について尋ねたところ、博士前期では 17.9%、博士後期では 26.0% が留学の経験・予定があると答えた（Fig.7）。博士後期では約 4 人に 1 人の割合で留学の経験・予定があることが明らかとなった。

海外渡航の経験がある大学院生に、その目的を複数回答で答えるよう求めたところ、博士前期・博士後期ともに最も多かった目的は観光であった（Fig.8）。次に多かった目的は、博士前期では留学、一時帰国、語学研修、学会参加であった。博士後期では、学会参加、学術調査、留学、語学研修の順で多かった。海外渡航を伴う学会参加に注目すると、博士前期の 7.9%、博士後期課程では 37.4% が経験していることがわかった。

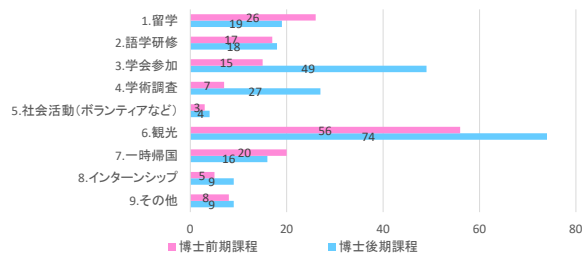


Fig. 8 海外渡航の目的

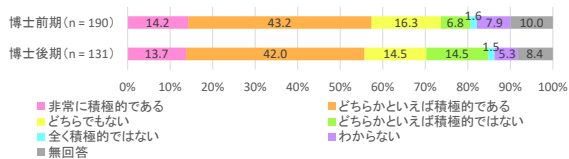


Fig. 9 お茶大の国際化への積極性について

以上のデータから、大学院生は観光だけでなく、留学や研究活動の目的で、海外に渡航していることが明らかとなった。特に博士後期では、博士前期よりも、学会参加や学術調査などの研究関連の目的により海外渡航する者が多かった。

お茶の水女子大学の国際化への積極性について、「積極的である」（非常に積極的である、どちらかといえば積極的である）と回答したのは、博士前期 57.4%、博士後期では 55.7% であった (Fig.9)。博士前期・後期ともに、5 割以上の大学院生はお茶の水女子大学の国際化への対応が積極的であると評価していた。一方、国際化が「積極的ではない」と回答した方の自由回答では、「英語で行う授業が少ない」、「国際学会への参加、共同研究、海外からの先生を招いたセミナー開催等の支援を充実させてほしい」、「学会・論文等、研究交流に必要なレベルのアカデミック英語を系統的に学ぶ場が欲しい」という意見があった。

「語学力を伸ばすことを目的とした英語の授業」についてのニーズを尋ねたところ、博士前期の 64.2%、博士後期では 71.0% の大学院生が「そう思う（増やしてほしい）」と回答した (Fig.10a)。海外で研究発表や研究活動を行う機会の多い博士後期の学生にとっては、語学力を高めることが必要不可欠となってきたため、前期課程よりも語学力を伸ばす授業に対する希望が高いと推察される。

Fig. 10a 「語学力を伸ばすことを目的とした英語の授業」の数を増やして欲しいと思いますか？

更に、「英語で行う専門科目の授業」のニーズを尋ねたところ、博士前期では 52.6%、博士後期の

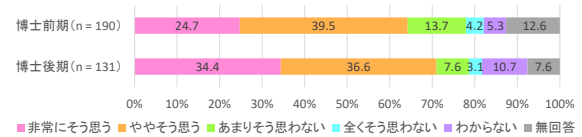


Fig.10a 「語学力を伸ばすことを目的とした英語の授業」の数を増やして欲しいと思いますか？

Fig. 10a 「語学力を伸ばすことを目的とした英語の授業」の数を増やして欲しいと思いますか？

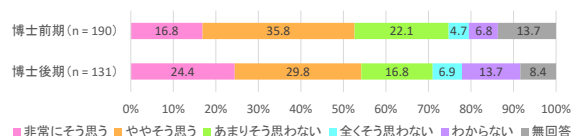


Fig.10b 「英語で行う専門科目の授業」の数を増やして欲しいと思いますか？

Fig. 10b 「英語で行う専門科目の授業」の数を増やして欲しいと思いますか？

54.2% が「そう思う（増やしてほしい）」と回答した (Fig.10b)。

お茶の水女子大学の取り組みについては、国際化に関して積極的な面が評価される (Fig.9) 一方で、学内の語学力を伸ばす授業 (Fig.10a) や、英語で行う専門科目の授業 (Fig.10b) については、授業数を増やして欲しいという回答が半数以上であることが明らかとなった。更に、自由回答からは、「研究に関する英語のサポートが必要」、「英文要旨のチェックのため English Desk を開設（復活）してほしい」、「学内でネイティブチェックを受けられるサービスが必要」、「アカデミック英語を学ぶ授業を開講してほしい」という声があった。国際的に研究成果を発信するために、大学で何らかの体制を整えることが求められているといえよう。

お茶の水女子大学のキャリア支援について

大学院生の修了後（退学後）の希望職種の上位にあがったのは、博士前期課程では、「4. 企業等の技術・研究職」35.3%、「5. 企業等の総合職・営業職」28.9%、「1. 大学・官公庁等の教育・技術・研究職」20.5% の順であった (Fig.11)。博士後期課程では、「1. 大学・官公庁等の教育・技術・研究職」に対する希望が 65.4% と最も突出しており、続いて「4. 企業等の技術・研究職」21.4% という結果であった。博士前期課程では、企業等において専門知識を活かした職種を希望している大学院生が多い一方、博士後期課程では、これまでに得た専門知識を活かして、大学・官公庁等などの公的機関において教育・技術・研究職を希

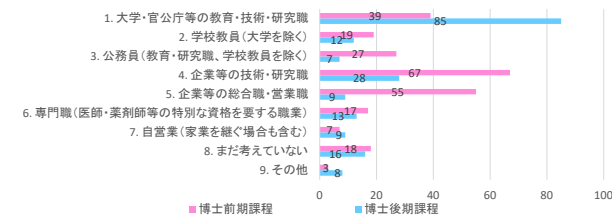


Fig. 11 修了後（退学後）の希望職種

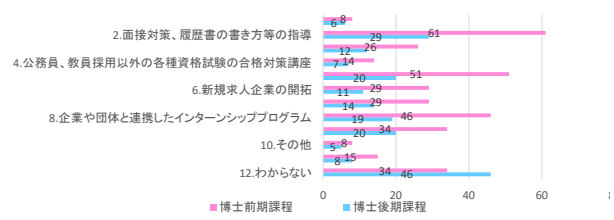


Fig. 13 充実させたほうが良い就職サポート体制

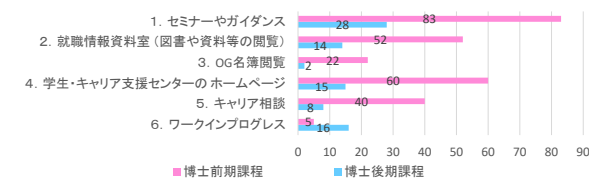


Fig. 12 キャリア支援の利用状況

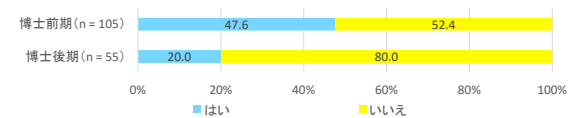


Fig. 14 就職活動による学習・研究への支障

希望する院生が6割を超えることがわかった。博士前期課程と博士後期課程では、希望する就職先が異なることから、博士前期課程では企業を中心とした就職支援、博士後期では大学・官公庁等を中心とした就職支援が求められていると考えられる。

キャリア支援の利用状況は、下記のような実態であった。まず、博士前期では「1. セミナーやガイダンス」(43.5%)、「4. 学生・キャリア支援センターのHP」(31.4%)、「2. 就職情報資料室」(27.2%)、「5. キャリア相談」(20.9%)の順に利用者が多く、博士後期では、「1. セミナーやガイダンス」が21.5%、続いて「6. ワークインプログレス(博士後期課程の学生を主たる対象とした、企業・機関との出会いの場を提供する企業合同説明会)」が12.3%の割合で利用されていた。自由回答では、「研究職・大学教員を志望する学生に向けてのガイダンス」や、「大学の研究職志望の人向けにポスト獲得や転移などの情報」を望む意見もあることから、博士後期課程向けのキャリア支援体制を整える必要性が窺える (Fig.12)。

お茶の水女子大学の就職サポート体制について、充実させたほうがよいと思うものを複数回答で尋ねた (Fig.13)。博士前期では、「2. 面接対策、履歴書の書き方等の指導」、「5. 学内企業説明会」、「8. 企業や団体と連携したインターンシッププログラム」が票を集めた。博士後期課程では、「12. わからない」が最も多く、次に「2. 面接対策、履歴書の書き方等の指導」を挙げる学生が多かった。博士前期の学生は具体的な支援を望む声が多く、面接対策や履歴書の書き方の指導、企業に触れる機会を増やして欲しいという要望が主であった。自由回答では、「OG とのつな

がりの強化」、「OG 名簿の更新」、を望む声があった。サポート体制そのものについては、「キャリア支援で理系優先と感じることがあるので、文理を分けて開催してほしい」、「文系大学院生のための就職支援をよりバックアップするような講座や企画がほしい」という声もあった。

就職活動を行うことによる負担についても聞いた。結果、博士前期では47.6%、博士後期では20.0%の大学院生が就職活動による学業への「支障が出た」と回答した (Fig.14)。就職活動による負担を感じる割合は、博士前期の約5割弱であり、博士後期よりも2倍以上多かった。この結果から、特に博士前期では、自身の専攻における学習・研究活動の見通しを立てるといったような、学業や研究活動における支援があれば、負担軽減が期待できるかもしれない。

上記の就職活動による学習・研究への支障が生じている要因の一つに、インターンシップへの参加が考えられるかもしれない。大学院入学後に、企業や団体などが主催するインターンシップに参加したことがあるか尋ねると、博士前期では40.5%に参加経験があった (Fig.15)。一方博士後期では、9.9%にとどまった。インターンシップへの参加経験は、博士前期の方が博士後期よりも4倍以上高い割合であった。博士前期課程における就職活動やそれに関する活動(インターンシップなど)は非常に重要ではあるが、この活動が学習・研究の支障となっている可能性もある。

キャリア副専攻について

お茶の水女子大学の大学院では、大学院修了後に企業や団体等に就職する学生のために、平成29年度か

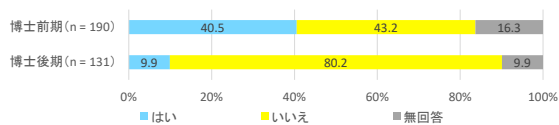


Fig. 15 インターンシップ参加の有無

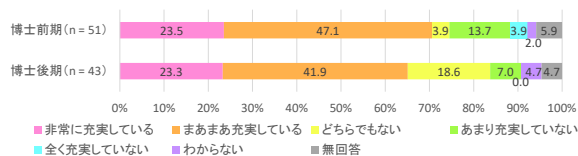


Fig. 16 大学院教育の評価：キャリア副専攻の授業

らキャリア副専攻を設置した。現在では、大学院生のニーズが見込まれる特定の職種を想定し、キャリア副専攻に【教員】と【公務員】コースが設置されている。そのキャリア副専攻の授業について、受講経験のある94名が回答した (Fig.16)。博士前期では、受講経験がある院生の70.6%が充実していると回答し、17.6%が充実していないと答えた。博士後期では、65.2%が充実していると回答し、7.0%が充実していないと回答した。受講した学生の約7割はキャリア副専攻の授業について満足しているという結果であった。キャリア副専攻の個々のコース（教員、公務員などのコースの別）について満足度は尋ねていないが、全体的に高い満足度が得られていることを考えると、大学院生の様々なキャリア形成のニーズに応じるべく、今後はキャリア副専攻のコースの多様化を目指していく必要があるだろう。

お茶の水女子大学の教育施設や研究環境についての評価

教育・研究環境については、「教室の冷暖房・備品・AV機器」と「図書館の蔵書数」において全体の3割以上が「不備がある」と回答した。特に博士後期の大学院生からは、「図書館による電子ジャーナルサービス」、「学部・学科・講座・コースの図書館」、「大学院生用の研究室・研究スペース」において不備を指摘する声が3割以上であり、これらの4つの設備については不満が高いことが認められた。

お茶の水女子大学の制度・体制に関しては、「学内競争資金」に関しては、博士前期の13.2%、博士後期では25.2%が「充実していない」（「全く充実していない」「あまり充実していない」と評価した。「充実している」（「まあまあ充実している」「非常に充実している」）と回答したのは、博士前期の6.9%、博士後期の16.1%であった。「経済困窮学生への経済支

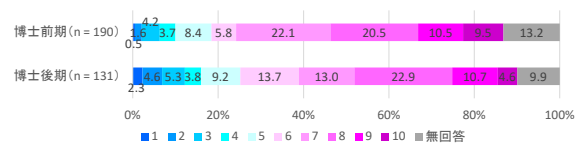


Fig. 17 お茶大の大学院教育に対する満足度

援」については、博士前期の6.8%、博士後期11.4%が「充実していない」と回答し、「充実している」と回答したのは博士前期の24.2%、博士後期22.1%であった。「学費免除制度」は、博士前期の10.5%、博士後期13.0%が「充実していない」と回答した。一方、「充実している」と回答したのは、博士前期の17.4%、博士後期43.5%であった。

「メンタル面に関する支援」については、全体では11.2%が「充実していない」と回答し、19.9%が「充実している」と回答した。1割以上の大学院生において不満は残るものの、2割近い大学院生にとっては充実した制度であるとの評価を得た。利用していない学生を含む43.8%は「わからない」という評価であった。「ハラスメント対策」では、全体の8.4%が「充実していない」と回答し、26.4%は「充実している」と回答した。全体の39.8%は「わからない」という評価であった。「メンタル面に関する支援」と「ハラスメント対策」については、全体の約2割が「充実している」と評価する一方で、「わからない」という意見が4割近く存在しており、学生に対してより一層お茶の水女子大学の取り組みについて周知することが望まれる。

大学院教育に対する満足度

総括として、お茶の水女子大学の大学院教育に対する満足度を10点満点で尋ねた結果、5点以下は、博士前期の18.4%、博士後期では25.2%であった (Fig.17)。6点以上は、博士前期の68.4%、博士後期の64.9%であった。5段階（1～5）に変換すると、平均点は全体で3.68、博士前期では3.81、博士後期では3.48であった。

自由回答による回答で多かった不満な点には、「研究支援（国際学会での発表支援、英語論文投稿支援）が必要」、「国際会議への参加費・旅費の支援が欲しい」、「経済的支援が充実していない」、「研究費の支援制度の充実が必要」、「大学院生に対する研究補助・奨学金・フェローシップなどを充実させてほしい」、「英文校閲を受けられるサービスが欲しい」などがあった。国際化に向けた英語による授業のみならず、研究

支援や、学会発表に関する渡航支援、経済的支援、英文校閲といったサービスの充実を望む声が多く挙がった。

まとめ

世界的にグローバルリーダーの養成を目的としている大学では、大学院の博士前期課程を修了は、標準的な進路となりつつある。このような時代の流れを鑑みると、本アンケート調査の結果からは次の 2 つの課題を挙げることができるのではないだろうか。まず、第一に、国際的な研究活動のための支援の充実が挙げられる。具体的には、国際的な研究発信力のための外国語教育の支援（英語で行う授業（語学力、専門科目）、校閲などを行う外国語サポートデスクなど）、および国際的に研究成果を発信するための経済的支援（英語による論文投稿支援や渡航費支援など）である。教育に対する満足度では、大学院教育の専門科目と外国語の授業の両方において、充実しているという評価が半数以上であった一方で、「語学力を伸ばすための英語の授業」、「英語で行う専門科目の授業」の数を増加してほしい声は、博士前期・後期の両方ともで 5 割を超える結果となり、英語で行う授業の充実が期待されていることが窺える。また、国際学会で成果発表を行う際の経済的な負担は大きく、大学院生の成果発信を妨げる一つの要因と考えることができる。自由回答においても、国際的な研究成果発表のための経済的支援を望む声は博士前期後期の双方から挙がっていた。大学院生のグローバルな活躍を推進するためには、経済的支援の更なる充実が必要である。

第二に、大学院生が研究活動に専念できる環境を整えることが挙げられよう。調査結果にあったように、お茶の水女子大学の大学院生の 1 週間あたりの研究時間は、平均 25.59 時間で、東京大学と比較すると短い。（例えば、東京大学の大学院生の 1 週間あたりの研究時間は、平均 41.8 時間であり、文科系は 35.6 時間、理科系は 44.0 時間であると報告されている（東京大学学生委員会，2016））。特に子育て中の院生は

どうしても、特定の時間で研究を切り上げなければならない状況に置かれやすいが、このような状況におかれていても、グローバル女性リーダーを育て輩出していくためには、論文や学会などが重なる繁忙期には、ある程度の時間を研究活動に集中できるよう、大学側が体制を整えることを検討してもよいのかもしれない（夕方以降の保育環境を整えるなど）。他にも、学生の研究活動を妨げていると考えられる要因（例えば、就職活動による負担、経済的な問題による労働時間の多さなど）負担を軽減し、安心して研究活動に励むことができるような施策が、今後、ますます必要になってくるといえる。専門的な知識を得て社会にはばたく人材を育成し、加えて大学院教育のグローバル化を目指すお茶の水女子大学においては、以上の課題を今後の教育改革に活かしていくことが望まれる。

参考文献

- 文部科学省 (2006). 大学院教育振興施策要綱 Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigakuin/_icsFiles/afieldfile/2011/06/15/1299716_01.pdf (February 23, 2018).
- 文部科学省 (2010). 大学院教育について Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigakuin/index.htm (February 23, 2018).
- 文部科学省 (2011). 「第 2 次大学院教育振興施策要綱」の策定について Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/1309319.htm (February 23, 2018).
- お茶の水女子大学 (2017). 「お茶の水女子大学 履修ガイド（平成 29 年度）大学院生」, p14（大学院の教育課程編成・実施方針）. Retrieved from http://www.ocha.ac.jp/campuslife/registration/index2017_d/fil/2017g_01honbun.pdf (February 23, 2018).
- 東京大学学生委員会 (2016). 2015 年（第 65 回）学生生活実態調査の結果報告書 Retrieved from <http://www.u-tokyo.ac.jp/content/400047648.pdf> (February 23, 2018).

2018 年 2 月 23 日 受稿